

善長老八評集
下

中村俊定文庫
文庫 18
418
2



小島先八海集



宣
甲申
明和之
五月

遠江懸川連中

研くと又匠の方も田唄くれ 蓼太

片とこれと新樹との明をれ 麻介

智家と釣瓶のそ下何らひく 周竹

ぬくぬゆをかんでまたり やびこ

之待れ智きをまこと驚し 巴陵

綱代木打て築れ秋とまき 兵笠

ウ

墨そあよ勢ふをかへりせそ 如川

堤才んとこれ龍の屋 露堂

むくまきれ志く交りぬえくま 之園

そこの釘へもひくひ法櫃 一鳳

竹笠よ氷室の飛脚まがり 阿郎

凡も甘露のりくれ吹らる 卜我

裏くも船りく遊て中書崎 雪歩

判りもりくは家の中ま 陵

八言下

引くは是轉回土もあつさす
凡是乃戻の月も紙の
去るは花のむくの京めし
夢も紙の茎の
湫形も兵も五佐尉
徒突也〜〜榮飯を
置〜〜も別〜
日もおくやく〜

歩 堂 風 笠 竹 川 郎 心

ナラ

あまのしもひ〜
おれう悟事と無縁は界
永采り古よ家路の持おれ
毎目り谷の寄り榮飯
令推〜
急うぬ撃り
あり枝を四川
あり〜

竹 風 川 我 心 郎 園 陵



八景下

曉 晴 出 う ち り 之 姑 を 笑 とも
 波 亦 も ち り 舞 の 意 く
 お り ぬ ー ハ 五 の る も 結 み ち
 貴 室 之 の 千 伏 乃 吉 乃 智
 美 舞 子 も 乃 ぬ 花 の 玉 隣
 八 心 の 依 此 ハ 幸 履 じ 叶

堂 園 我 休 步 笠

里

駿陽吉原連中

葉う太

雪のふりそ色くも松や枝の葉
 里の尾ののちあつきの月
 雑学のえんを新海もたあふ
 せんくも枝柄くもあき
 そまゝと枝威ハくぬ鳥も
 山をまゝよめてあつらふ

麻介
 乙児
 雪後
 和雲
 葉六

ウ

葉のふりそ色くも松や枝の葉
 里の尾ののちあつきの月
 雑学のえんを新海もたあふ
 せんくも枝柄くもあき
 そまゝと枝威ハくぬ鳥も
 山をまゝよめてあつらふ

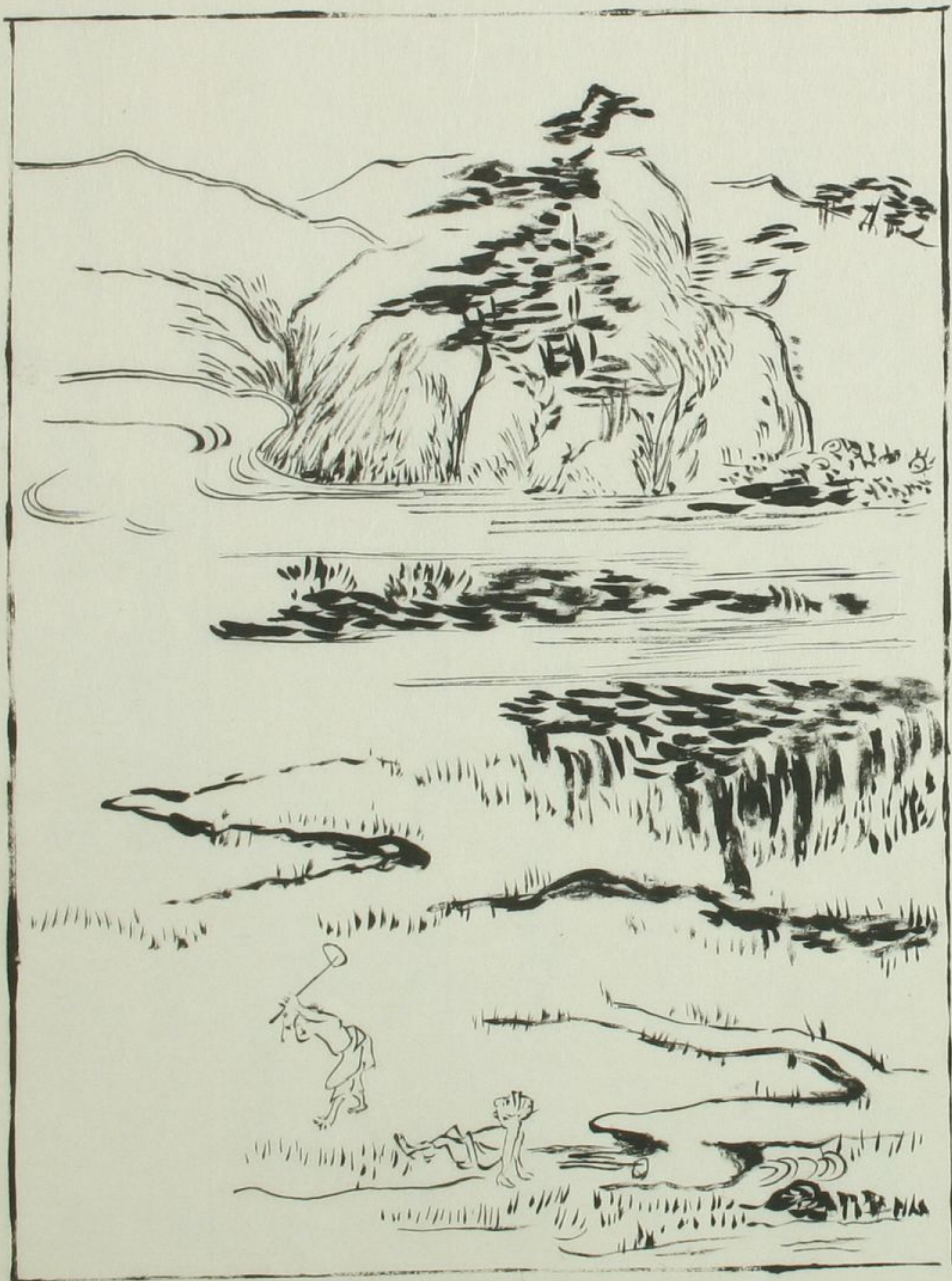
湖青
 十笑
 古浦
 二毛
 日平
 乙道
 阿音
 雪貞

才樾も何そ花とよ六絳と亦
かふ信頼りし生き何あま
月うさしもひりく吹くも
来りし厚のふりひるる
度のもれ五伯五母石おんれ
りし汁の橋お吉
朝露する新地もそこよし高
浴衣も过り花もらりり

杜兮
見後雲六青芙蓉平

世噂のあきもいつくきり原
いよ昼めりしう戻るを習ひ
神風の五徳と何れも百官志
吾独なまらぬ蘇世かうも
たて横よ木履の音も扱も
この名月れあふるも心あま
もるくも蹤の師通呼下
蘇てハ萩のたのう帯目

道詞毛音貢兮雲後



八詠下

ナウ

八詠下

六

あけこまき起まぬ家のこゝをたて
 之うれ庄のあまもあれま
 とやうくとあけ瀧をとらばめ
 とも色あまふく雉の鳴るれ
 波浪の火よ立もる花の結すく
 とけき川原も風のやうき

平 六 青 毛 梅富 執筆

駿陽瀬戸連中

蓼太

花多れくふらむ鳥帽子山

勅使の駕も先柳 陰 麻介

小判くくけハ海軍の比る物 大賊

お堂ののたまるうり 千潮

習明の二十九り生れくふ 古江

冬はふふく一七方の時るま 白鷺

う

新とはのそそハるくぬ糸川古 倭水

書く聲より春也せもや 洛川

誘ひ人の望み聲で誘はて 妙二

かゝる世もつゝ甚く色なり 五秋

山麻之北朝 杜若 夕るん 花残

礎あれくみくおの月 塘瓜

尾つきれまうのそまきり 潮

中りくちり踏ハ債よふ 賦

空^證鏡^證り三尺口の人を
新都の所を此風も強も
あれおとまのつ橋と吃も
畑も念佛のよおうと
乙多れおもたも屏う崖
た夫う智恵此俯と出
祐成を祖師は孤子のな加
たまうらるるりやも此
は

川 江 我 乙 秋 水 瓜 珍

我ハ足減るる時お
堪忍代ハおあとも
去りよと世と徳白のふれ川
お新架う動く國 雨
推挫よまらと更て月其
一書鞋の美は遊は
理石をり扱る袷の流る
よや、空は根ハあも

賦 潮 江 川 潮 糖 二 秋

東武連中

夢太

牛篋を成ぬ山や松林風
 あうつよふよふ臘ハ此星
 酒造かほく男の嘗て忍て
 角力の時此耳う片し
 糸今此目ふよ押さ下り船
 日ハよきやうよるの中う

麻介
 雷堂
 乳峯
 鼠腹
 魚改

ウ

精絶強うううの烏帽子志て
 茶漬さううあうらうて是
 さへ袖を振るの境の亥の子あれ
 那智八十の山ハえうり
 無えり似有ぬ曆持阿えせ
 むもろくきと志を原
 月十うふ膳を田毎よ嘗り
 飯綱志すて地ハ中此を

茶路
 祇什
 桂止
 眠我
 太喬
 柀太
 桃流
 飛鯨

丘つまよ〜〜〜
 家〜〜〜もたつ〜百尺
 市城〜〜はま〜茶の〜
 綿帯櫓の霞一ま〜
 十重盤子差も〜
 西〜東〜**同**若〜
 あ服の袖と〜
 か〜二階〜海ぬか〜
 我年
 信夫
 楚水
 完車
 六窓
 堂
 峯
 腹

這〜〜
 法炮投〜
 浪中似の〜
 拾〜
 既子帆を揚〜
 た〜
 月〜
 喰〜
 年
 我
 路
 車
 喬
 汝
 山
 什

八景

十二

渾の子子解明の僧あまあま
 益安矣をそれハく死く
 くらと海くかくく状のそ長く
 むつと死くと只あ簾さき
 咲おくふと若元の花の能
 ねくハ仙家の柳の山も
 窓 夫 水 林 流 鯨

瓢中吟

初丁やそれふ昔の越の宮東武 婆心
 淋くさと海くもくくく世の代 金沙
 さくくく木の間よまのあり舟 吏仙
 着るくと動く人なるくおれ月 自来
 蝶々羽の幾日たむむそ月日る 眠我
 常や花な記竹もよふせん 鯉半
 是ひげく雪ふ湯かひむれが 楸石
 名月や扱のさくくの中れを 芦一

八咏下

十一

十六夜や女もくち此亭にふり
 ねえ是を下戸とも見えぬ後の月
 女
 野菊
 桃もや雛も三日此亭にふり
 夢把
 炭くりにておれ都は甚くもくち
 魚波

菊咲くともくち甘く昔はあり
 斑象
 出代や夕霧ハ代旅此く色を
 梅笑
 その噂の小川ハいつく織月
 蓼旦
 知れぬやま笑ひ出守山もくち
 快車

ちりたりや冬此日敷のあこも色
 燕波
 幕半に挑灯かぬ梅哉
 前雨

裾時りさきさき
 うねとよ

富士もてぬ家丁うなを色赤此や
 桂山
 志く業や月よ白くも集くもま原
 蓼駒
 とくおれ書かすもくち湯屋が
 株太
 何んせそむ笑せんふ芙蓉
 吐月

あつたは上ともくち川茄子哉
 乙児

五日るや峯のりく根ふ科
 空色よりうてさくは名あふ
 人あふぬ内侍ふ秋^夜空う丸
 四阿屋の二方障子やほれ月
 昔もれ平らなむとハさくう丸
 内りもむとさゆりくお月
 うつくさ水田の草やく月氷
 二日月の如く神や京まき丸
 猪のふふ道なりさるこく

太喬
 山幸
 飛鯨
 如帆
 空杖
 我年
 麻介
 菊堂
 北魚

動く柳尺で居る暑う丸
 西りも柳ぬさくうかんと香
 北市
 阿香

病後の歌

合飲のふれ枕挽せん夫の秋
 迦ろを一日にねくもく丸
 田を賃よ入て淋き管かな
 色を及れ春来く赤く亭橋
 水澤もくわ水陰もく初時る
 麦前や昔強く新法師

蓼太
 蓼花
 白鳳
 卷耳
 吳雪
 燕波

じりるの山々 軋くみ葉の風
 馬雲
 柳樹より吹く きてや角力より
 春鬼
 物あらず 風と心と 如花地は
 和水
 遠文て字の 六月なり 月
 桃弓
 月を きて 耳より ばく 砧の風
 桃流
 杉風も ばか けて 砧の風
 女
 江と 舟と 流る 四子 打月 砧の風
 信夫
 踊る 婆も 数なり 七小町
 周竹

上毛ちとく 枯んせし 勢う風
 盤古
 いう 栗を 落して 鹿の 啼ぬ
 麻介
 お井 殿より 嘉例の 給う風
 秋
 求光
 七夕や 故屋 泊村の ち花地
 梅勤
 庵 ちとく 減す 砧の風
 宗瑞
 奥州
 行る ところ ちの山 やか ちとく
 福島
 吞溪
 常風の 都より 来る 庵の ちとく
 仙臺
 習齊
 先達よ おく 流して 晴なる ちとく
 郡山
 露滴

八坂下

十六

家鴨もれりしむらり杜の
郡山 露香

羽州

ありと何る多た浮葉や子松急
大沼 鷹窗
城下も之を人のきぬこむ
上山 投茶
望月つきて連歌をとりや流月
日 六川
瀧ハや梅も室^{宝重}の夜
山形 千紅
寒江 吾竹
あやれ十萬家

室カ

加賀

世を捨て山陰もふき梅の風
圃東

笑も多し筆おろ海せし時ふか
既白
ふ葉や日よ咲くと八思く連原
尼 素園

越中

湖より十町をりり故城の風
麻父
葉内若し松露れりる法あり
李夫

東武

骨折て移れ志つとくり枯の水
雷堂
角力とりお髪とくして梅は月
駿河 麻介
色くももの初や朝とる路
日 燕波

八景下

十一

口切や今日、唇のそのちも 猛古
 背戸くも駒迎あり大根引 園竹
 火吹作らるひとりのけよ冬籠 六窓

相州

籠耳も淋きもぬれぬ人 深中
 堀より又人より軒より 為好
 ハッパッパッパッパッパッ 蓼坡
 風やんてお色よふもあつた 魚尺
 川せきやもあつたつらと飛くも 莎汀

浮草や亭も浮くと破あつら 山秀
 者喰ふ曇もあつて蓮尺が 仙茶
 芋穂の魂飛んで埴う甲 素月

這出く流を欠て若蛙の肌 小田原 麥由
 喜うな。秋面ふき後菜が 芋魁
 女若れぬまて来まらう杜若 其要
 夕顔のけよ五條の月尺が 尾跡
 文科や子も捨てある田植時 得魚

上毛

我衣を端くのり中雀

出産

破顔

ひら夜横ふやが裾ゆ

唇風

海棠の蝶はつて吹きり

雲芝

故柁やとて立ても草よ入る

厩橋

素輪

書子あるかめとまう尺と死の花

友岡

雪丸

川音をゆきて故心の月おが

鳥文

旅人も飛機も湧くよ草か

湖曉

さされうし花よあやうし帆り船

閑山

昼く白や唐より日杖又咲

迂生

武州

顔見合ふそ萩よせよあやうし

八王子

子一

而登れ坊明秋りりあやうし

其竹

や中庵

這習ふまてれカや朝の草

趙鳥

朝ねきの一日出来て衣

仙衣

大は弦のおもあやうしや中庵

柳几

多岐の海も残りさきさき清く
 美舟やあゝ八分限の七軒家
 染るねて松よ入りた馬田
 吹寄る世の曇り重なる
 朝もややうくおと起あてせ
 帆のさくぬ入江よばく馬田
 美舟やりとゆく北朝時
 鶴はつるよと遊てきりた

赤岩 歸景
 山史
 曲枝
 五出
 巳人
 都川
 三時
 蓬戸

摩訶目の岩根よ居つる
 山若くも聞そくそをぬ
 家ひもひまうつらうみ
 卯のまはあまうてふ
 あらうろく老曾れ杜よ
 あゝと横てあゝや海

豆州 吞吐
 甲州 踏雪
 長州 花上
 信州 自徳
 常州 之六
 紀州 梅嶽

下総

小嶺崎よ秋ハ陰きて踊る風
 眠江

入歌下

之味弥の調子もつしやかんとぞ 小見 唯我
かさしてハ葉もも奥あつ特舟水 大寺 山奴

上総

渡舟の空れ舟影やりきん 平田 六渡
雲れおの田毎をふる蛙うれ 春字
水もやま田の中れて水川 呂風
物音れ江もつらとや鳴蛙 岷水
何くとかろる習り 鳥地 更英

水梅やさしに一日あきらけ 夢下
美艸や経ふもの又陰日 雪和
昼うらやふのそもも尺を過り 夢阿
行喜を笑もとらうあむむ 都友
梅尺を喜をうつかく世地 不醉
菴さくや折しと幹のともち 南壽
胡令らりかやき出るらん 砂川
富士向し之保ふハ松の如射る 川名 山紫
いさよむやそまを流る雲れ 御風

芋の葉は玉ちりる露や月共終法目
早稲の穂は房は目出度陸々木更津 芦風

三州

馬の背で火根あゝお時る二川
紙雛や何志んせそも姉もろよ吉田 杜鳥
遊見

遠州

ぬきこゝろやつ萩の雪も時る掛川
五月るや名ふよいつね就い之園
松の音芦花着してふ多阿郎
如川

いかりや十日の年みたり一鳳
秋まやまゝふる北中露堂
川風はけう花ちるまゝみト我
山の湯ふあゝむ雪ありや雪歩
恙綿のさゝとあゝ機柱
ぬ毛の神まゝハこの梨も花野彦
若柳の物やむ時卯日少年 長庚
あゝ門をぬきてハ涼う吳笠
堂よりぬゝやうなり初梅巳陵

乙階うらみ橋示用 桃目
 井の名もちりー去阿はく女 利可
 あやめ草野や白木北月の子 百流
 涼もや之望し月の登りし 呂竹
 夕顔やりの入流る源氏や 雪夫
 葎おや糞ををたつ沖籠 芦毫
 檜々やあつなうせつはもせ次 兔園
 申あしねあしうや松の片時る 月岡 渡道

山姫北裳の裏又せてはく平尾 冬雁
 一あ急ハ望日よりりり杜鶯 桃英
 裏見せしぬみ系阿も生高加茂 素女
 塚のあ阿きも異さハ苦三門 三曉
 名外や風や柳の影やし 虚舟
 まふハ十日よあて牡丹風潮海寺 楚竹
 こ三尺清してハ灯寸雪うを 五羊
 吹過し風も流り鼻月る 布流
 うつあてす人ハなうき次内田 楓車

八歌下

世三

被^く風のよほる^る 故^こ禁^んる^る 風 雞路
川^か柳^{りゅう} 常^{じょう}て^て一^{いつ}木^{ぼく} 此^こ 而^に 然^{しか}る^る 也 寛夫
伽羅の名^な 此^こ 茶^{ちや} 舟^{ふね} も 吹^ふ や 浪^{なみ} 川 金谷 茶橋
茶^{ちや} 花^{はな} や 雪^{ゆき} の 衣^え 此^こ と 淡^{たん} 嘆^{たん} 相良 南梁
水^{みづ} 多^{おほ} 此^こ 陰^{かげ} 而^に ち あ^あ け^け て 柳^{りゅう} 風 濱松 麥途

尾州

名^な 月^{げつ} や 郭^{かく} 巨^こ う 淵^{えん} も 芋^{いも} ち^ち 也^や 有^あ 名古屋
牛^{うし} 追^お 此^こ 常^{じょう} 一^{いつ} ち 出^い ち 也^や ち 郭^{かく} 此^こ 八^は 龜^き
常^{じょう} や 篠^{しの} 子^こ 原^{はら} 是^こ ち 老^{らう} ち 帝^{てい} 鳥^{とり} 申^{まへ}

あ^あ ち^ち け^け て 世^よ の 縁^{えん} ち^ち や 稀^ひ ち^ち 也^や 紀^き 来^{らい}
常^{じょう} 此^こ 喜^き 守^{しゅ} 山^{さん} と ち 一^{いつ} 柳^{りゅう} 風 佐谷 吟山
俯^ふ ハ 聖^{せい} 仰^{やう} 向^{むか} ち ち 少^{せう} 此^こ 日^{にち} 鳴海 鉄叟
相^あ ち^ち 月^{げつ} や ち 此^こ ち 海^{かい} 六^{りく} 明^{めい} の 庵^{あん} 和菜
ち 枯^こ や 山^{さん} 柳^{りゅう} 魚^{ぎょ} 此^こ ち 是^こ ち 蝶^{てつ} 羅^ら

伊勢

ち 枕^{まくら} を 人^{ひと} の 念^{ねん} や 福^{ふく} ち^ち 人^{ひと} 像^{ざう} 二日坊
梅^{うめ} 吟^{ぎん} や ち ち 三^{さん} ち 急^{きゅう} 鳴^{なり} ち^ち 一^{いつ} 佐^さ 丈^{ぢょう}
秋^{あき} も ち^ち ち 深^{ふか} 入^い 此^こ 世^よ ぬ 五^ご 葉^は ち 巴^ぱ 龍^{りゅう}

浪花

三日月一房く秋の空より
夕中や煙飛かふみの京
馬明
旧國

江州

あまのりそ中よる名や二ッ星
猪組よちも尺くかきつる
文素
可風

芭蕉忌

生ぬく枯く尺せし柳の風
秋の日は地にも枯けぬらん
麻介
燕波

もせ成業やあとのおと息りれす
名月や踏ふ尺是くまはれ之
山ひく越へて折るか
放さぬるを孫く運るお月
吉原 古夕
三連
大宮 梅五
封姑

此ハ諸の画ハ吾々中教師の遊藝を
 せしむけり其を空にかりあせし
 その心もよきありしに
 清言ハ句こよひふてり
 吾々を助むる

四英房夢旦



此書を著す所の意ハ
 一心中なるものあり
 幸くよみ濃困らず
 是を著すは
 ありしに
 此法を
 阿まらざる

目録
目録
目録
目録
目録

